講演

イスラーム文化と日本文化

片倉もとこ

はじめに

こんにちは、久しぶりに麗澤大学の美しいキャンパスにおまねきいただき、嬉しく有難く思っております。今日は、パワーポイントの映像ではなく、実際にイスラーム衣装を、お見せしたり、話の途中で、「イスラーム体験」のまねごともしていただこうかしらと思っています。

お手元のレジメの最初にアラビア語で書いた挨拶があります。「アッサラーム・アライクム（السلام عليكم）」そして次に、「ワ・アライクム・サラーム（وعليكم السلام）」。日本語では、「あなたの上に平和を」「いや、あなたの上にこそ、平和を」という意味になります。ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、これが今世界中で、地球上で一番多くとびかっているといわれる挨拶です。日本のテレビなどをとおしても、お耳に入っているのではないでしょうか。

イスラーム（イスラームという言葉の中に「教え」という意味がふくまれているのでイスラーム教とはいいません。）は、創始者ムハンマド（マホメット）の妻で、メッカの大商人だった女性ハディージャが最初の信者になり、次第にふえて、現在のような膨大な数になりました。宗教人口というものは、誇張されることも多く、なかなかとらえ難いものですけれども、二〇〇九年の十月にアメリカの独立調査機関ピュー・リサーチ・センターが発表したデータによりますと、イスラーム教徒は一五億七〇〇〇万人、およそ一六億人におよんでいます。世界の人口の半分以上がイスラーム教徒になる日もそう遠くはないという学者もいます。

今日は、皆様にイスラーム服もご紹介したいと思い、着てまいりました。ムスリム（イスラーム教徒）がみんなこんな格好をしているわけではありませんが、私がフィールドワークをしました中東、アラビア、それから世界最大のムスリム人口をかかえ

るインドネシアでも、こういった服装が見られます。家の中に入ると、羽織っている黒いガウン（アバーヤ）は脱ぎます。これは去年、サウディアラビアのリヤドにまいりましたときに手に入れたものですが、昔とちがって、ずいぶんモダンになっていました。リヤドは、もっとも保守的だともいえるところなのに……と驚きました。透明感のあるようなモダンなアバーヤも、でまわってきているようです。そのしたには、人それぞれ好きな服装をしています。パリのオートクチュールだという世界の流行の先端の服を着ている人も大勢います。私が、今日、着てきましたのは、アラブ首長国連邦のアブダビで店をひらいているパキスタン人が刺繍をほどこして仕立てあげたアラビア服の一種です。

イスラーム社会の男性の服装は、最近テレビなどにもよく出ているので、ご存知でしょうが、白の布でつくられた「オバＱ」スタイルのもの。ついせんだって、帝国ホテルでアラビア人たちの多く集まる会合がありましたら「オバＱ」スタイルの男性たちが、ぞろぞろと東京駅の近くから会場にむかって歩いていました。「アッサラーム・アライクム」と挨拶しましたら、驚く様子もなく、「ワ・アライクム・サラーム」とかえしてきました。

アラビア語は、なるべく詩的に交換するという習慣があります。日本人が「こんにちは」「こんにちは」とくりかえすように、挨拶をオウム返しすることはしない。「おはようございます」というときは、「サバーフ・ル・ハイル」＝「いい朝ですね」と声をかけ、「サバーフ・ン・ヌール」＝「光あふるる朝ですね」とかえします。お客様をむかえいれるときには、「ナワルトナ」＝「あなたは光を持って来てくださった」といいます。それに対しては「ヌール・ビ・アハル」＝「いや、光はもともとあなたのほうにあったのですよ」とかえす。そうして、出会いがはじまる。

イスラーム世界では、「人生とは学ぶこと」だと申します。『ハディース』にある言葉です。イスラームの聖典は日本では『コーラン』とよばれることが一般的ですが、これは、西欧風の発音が、日本にはいってきたものです。『クルアーン』といった方がアラビア語の発音に近い。イスラーム世界の人々のあいだで、身近に存在し『クルアーン』と同じように、大事にされているのが『ハディース』です。

『クルアーン』のことを「イスラームの聖書」だというふうに解釈していらっしゃる方も、日本には多いですが、これは違うのです。キリスト教でいう『聖書』に当たるのは、『ハディース』なのです。『ハディース』はイスラームを創始したムハンマドの言行録です。「こういうことがおこった時に、ムハンマドはこんなことをいいましたよ、こういうふうになさいましたよ」ということが書かれてある。新約聖書の『マタイ伝』『ルカ伝』のようなものです。「マタイが聞いたところによると、イエス・キリストはこういう時にこういうふうになさった」というのが書いてあるのが聖書ですが、『ハディース』はイスラーム版新約聖書といえます。

『ハディース』は、預言者のまわりにいたいろいろな人がつたえたもので、たいへん多くのものがのこされ、ひろくつたえられています。沙漠でも農村でも都会でも、

人々は『ハディース』のなかにある文言をよくおぼえていて、日常生活の指針にいたします。「人生とは学ぶことだ」というのもそのひとつで、イスラーム世界の人々にとって大切な生活の教えなのです。

　大学や研究所での仕事から離れて、私も、ようやく今、「ときもち」（「かねもち」でなく）になり、学ぶことに集中できるようになりました。これからは、どちらかというと、講演や講義をするよりは、皆様とおなじように、そちら側にすわって聴衆の一人としていろいろなかたのお話を聞かしていただきたいと思っています。学ぶということは喜びですね。梅棹忠夫先生も、「学問は道楽や」といっておられます。学ぶことは、本当に楽しい。

　私が長くよすがにしてきた学問は、文化人類学と呼ばれているものですが、イギリスなどでは社会人類学、ドイツでは民族学と呼ばれます。一番の特徴は、毎日の生活を人間がどういうふうにおくっているか、つまり日常の世界に焦点を当てるということです。

　その世界を知るために、人々の間にはいって家事のお手伝いをさせてもらったりしながら、寝起きをいっしょにいたします。非日常より日常に重点をおくのですから、足で考え、五感でつかみとっていくわけです。文化人類学者は「自分の村」をもつことから、まずはじめます。私にとってはアラビア半島の遊牧民の「ムラ」（「村」というと、農村をイメージしやすいので、あえて、「ムラ」とよんでいます。）であったわけです。一年と二カ月、全体で一四カ月、その人たちと一緒に住まわせてもらいました。一二カ月いますと、春夏秋冬の一年間の移り変わりの生活がよく分かります。それにくわえて、準備の期間に一カ月、それから私は調査した地域で得た情報はその地域になるべく提供する、という形でお礼をするようにしていましたので、それにほぼ一カ月かけていました。

　遊牧民たちと二年間ほど生活をともにする機会にめぐまれ、沙漠の中で野宿したりもしました。お星さまと交信しながらねむりにつくというような……そこでの調査結果は、日本に先んじてニューヨークのコロンビア大学出版会から世にでることになりました。そのころの日本ではまだ、中東やイスラームに関心を持つ人もいませんでしたし、西洋からはいってきた偏見もありました。いまだにイスラームフォビア（イスラーム恐怖症）といわれるようなものも存在しているようです。

　沙漠のような厳しい生活環境の中で、人々がどうやって生活しているのか、沙漠の生活と都市の生活のちがい、そういうことをまず勉強したいと思いました。しかし、その過程で、だんだんイスラームというものが浮き上がってきた。イスラームというものが、人々の生活のなかに溶けこんでいるということがわかってきたのです。

　イスラームは、一般的な宗教の定義とはちょっと違っているところがあります。一般に宗教は「魂の救済」に重点がおかれます。しかしイスラームの場合には、イスラームという思想と哲学を土台にして構築される生活様式全体をさすのです。宗教というより、むしろ生活様式だというふうに解釈した方がわかりやすいのです。

　生活様式は日常とむすびついたものですから、「どこそこでテロが起こった」とか

「こんな事件が起こった」という、たまにしか起こらないような非日常的なものからはイスラームは見えてきません。イスラーム世界で起こっている非日常的なことには、尾ヒレもつけられて大々的に報道されがちですが、日常世界のことは、ほとんど明らかにされない。「新しく聞く」ことに集中する「新聞」の宿命といえるかもしれませんが。

　日本人が、イスラームについてわからなかったり、偏見をもったりする原因として、「枝葉末節の拡大解釈」という理解の仕方が考えられます。たとえば、イスラームというと豚を食べない、お酒を飲まない、女性はベールをかぶらなくてはならず地位が低い、といったことだけがとりあげられますが、イスラームの根本思想からいえば枝葉末節なことです。それを拡大して、それらがイスラームだというふうに解釈してしまう。マスコミも、その部分的な情報を盛んに書きたてたりする。そこから得た偏った知識で、「イスラームは知っているよ」と思いこんでしまうことが多いようです。

一　わかる日本？　わからないイスラーム？

「わかっているつもり」は多い

　一般にイスラームはわからないといわれます。イスラーム教徒のことをアラビア語で「ムスリム」といいますが、ムスリム自身もイスラームのことをわかっていない人がずいぶんいるようです。

　私たちは日本の文化に関しては、わかっているつもりでいます。ところが、外国に出てみると、「あなたは仏教徒でしょう。仏教ってどういうものなの。タイの仏教とは、どうちがうの？　神道ってなんですか。仏教と神道とどこがどういうふうに違うのですか？　日本では、どうして神道と仏教が一緒になっているの？」などと聞かれて、「いやあ、日本のことは、知っているはずだったのに、うまく説明できないなあ」というようなことになります。同じようにイスラーム教徒もイスラーム文化についてわかっていないところがあるのです。

見えないものに価値をおく文化

　イスラーム文化と日本文化は、たいへん違っているから、今日の演題になったのだろう、と思っていらっしゃる方もおられるかもしれません。が、案外、似ているところもあるのです。日本に住んでいるムスリムたちは「日本人はイスラームってわからないというけれども、日本人はとってもイスラーム的だと思うんだ」といいます。日本人は無意識のうちにイスラーム的な行動をしているというのです。詩的なものを大事にするということもそのひとつです。イスラーム世界では、詩心を持たない人は人間でないとさえいわれます。クルアーンも詩的な要素が多いゆえの魅力があり、毎日、朗誦されるアザーン（祈りの呼びかけ）も詩的、音楽的なところが、人々をひきつけているようです。旅をするときには、お互いに交替して詩を吟じたり、物語を、つぎつぎ順番に語り合うのです。「今度はあなたの番ですよ」といわれて、わたしは、どぎまぎしたことも、たびたびでした。財布を忘れて買い物に行ったら、「そこに詩でも書いておいてくれればツケにし

てあげるよ」なんていわれたこともあります。そういわれても、そんな簡単に、詩なんかつくれるはずないと思ったんですけど、そういうことが頻繁にあるのです。

　自分の素養のなさをなげくばかりでしたが、昔から日本人は、日々の生活のなかで、詩を吟じたりすることも多かった。日本文化にも、物語や詩を重んずる伝統がながれているようです。このごろの日本は俳句ブームですね。今朝も、NHK・BSでフォト俳句などというものをやっていました。日本には、人々のあいだで川柳とか和歌とか俳句などをつくる集まりが、あちこちにあります。皇室の歌会始めなどに誰もが応募できるといった風に、日本文化のなかに詩の文化が根づいているという点でも、イスラーム世界と通じるところがあるようです。イスラームの発祥地であるアラビア半島は、ご承知のとおり、自然環境のきびしいところでした。そこに生きる人たちの生活のなかから、激しい自然と折り合いをつける文化が、でてきたとも考えられます。万葉集のなかにもあらわれているように、日本は、古来、自然災害のきわめて多い島国でした。そういうハードな条件のなかで、ソフトな力がはぐくまれてきたといえるかもしれません。

　ジョセフ・ナイは、アメリカの国際政治学者にありがちな政治学的限界があるとはいえ、経済力や軍事力といったハードパワーに対置する概念として、ソフトパワーを提唱しました。イスラーム世界も日本も、文化というソフトパワーを大事にする民族性をもっていると考えられます。イスラーム世界は石油、テロ事件、日本のほうは、科学や技術などが突出して語られてきましたが、多勢をしめる「ひとびと」の日常生活をみてみますと、どちらも、見えないものに価値をおく社会であるといえるでしょう。

思いやりを尊重する精神

今日、廣池千九郎記念館を見せていただき、廣池千九郎先生のおことばには「思いやりの心が必要だ」をはじめ、イスラームの教えに近いものがあるなあと、廣池先生の思想の広さ深さに感銘いたしました。

　現在のサウディアラビアにあたるところでイスラームが生まれ、アラビア半島の南端オマーンあたりから、古来、たくさんの船で、人々が東南アジア、インドネシア、マレーシアの方に、イスラームという文化をもって、渡っていきました。さきにふれたように、現在、世界の中で、最もムスリム人口が多いのはインドネシアで、次にパキスタン、インド、バングラデシュです。

　インドネシアで、私はこんな表現が、人々のあいだにいきかっているのを、見出しました。「モホン・マアフ・ラヒール・ダン・バティン」＝「もし私があなたに対して、心の内や外で悪いことをしてしまっていたら、ひょっとしてあなたの心を傷付けてしまっていたらごめんなさいね、許してくださいね」というものです。「いやあ、悪いことといっちゃった、ごめん」とは、私もいいますが、知らない間に人の心を傷付けていることまで謝るなんて、そこまで丁寧なことはしたことがなかったので、これを聞いてびっくりいたしました。

　「サマーヒンニ」＝「許してくださいね」という言葉も、アラビア半島のほうでは、しょっちゅういいます。フィールドワーク

に何回かはいった半定着の遊牧民のムラでも、むらびとたちは、私に、いつも「サマーヒンニ」と声をかけてくれました。私のほうが、お邪魔し、ご迷惑もかけていたにちがいないのですが、「あなたのこころを、うっかり傷付けてしまったかもしれない。お許しくださいね」というのです。相手の気持ちはよくわからない。なるべく思いやるようにしたけれども、いたらなかったことについてはごめんなさいね、というわけです。

東南アジアでもクリスマスカードが飛び交いますが、「モホン・マアフ・ラヒール・ダン・バティン」と書かれたイスラームカードも飛び交います。インターネットでも、なかにはアニメや音楽つきで御覧になることができますが、この表現はもともとアラビア語からきています。イスラームとともにインドネシアに移動してきたアラビア語の表現が、マレー語化したものなのです。

皆様ご存知のように、キリスト教では「愛」がキーワードになっています。仏教では「慈悲」でしょうか。神道では「浄」、「清浄」の「浄」です。じゃあ「イスラームのキーワードは何だ」と聞かれたら、みんなが、これだというのが「キャリーム（寛容）」です。イスラームは厳しいというイメージがあるのですが、実際には大変ゆるやかだといっていいかもしれません。キャリームは、「寛容」という意味にくわえて、「ゆとろぎ」という言葉の意味もふくんだ雰囲気をもつものです。

最近『ゆとろぎ』という題の本が、岩波書店から出版されました。「ゆとろぎ」という言葉は、あとでもう少しお話したく思いますが、「ゆとり」と「くつろぎ」を足して「りくつ（理屈）」を引いた私の造語です。キャリームは、「ゆとろぎ」とつながる感じをもったコンセプトだといえます。

神への感謝　人への感謝

廣池先生が「感謝の心」ということをおっしゃっていますが、これを手がかりに、イスラームでは「感謝」とは、どんなものかということをみてみますと、日に五回の礼拝のなかに、もっともよく象徴されているといえるでしょう。「サラート」とアラビア語で呼ばれ、日本語では、「礼拝」と訳されているものです。一般には、あとでふれますもうひとつの祈りもいっしょに、すべて「祈り」とよばれていますが。

「サラート」（礼拝）は、形式と時間が、ほぼ決まっていて、イスラーム教徒はお祈りばっかりしているようだと思われている節もありますが、実際はそうではありません。最初の礼拝は、明け方、お日さまが出る前。「ああ、眠いから今朝はやーめた」とサボる人や、むにゃむにゃといい加減にお祈りする人も、もちろんたくさんいます。二回目がお昼過ぎ、それから日本でいえば、午後三時のおやつのころに三回目の礼拝、日没の直前に四回目、あとは寝る前に五回目ということになります。金曜日のモスクでの集団礼拝は、時間がきめられていますが、それでも遅刻する人も多い。職場や家庭でなされる礼拝は、最初の礼拝フアジュルと日没の礼拝マグリブ以外は、日々の生活の具合に応じて、「気分転換にサラートするか」といったゆるやかな感じでなされます。

九時から五時までの八時間労働の中に礼拝がはいるのは、一回か二回です。現代日本人もコーヒーブレイクとか、お茶しましょう、ということで、ちょっとお休みを取りますね。イスラーム教徒はその代わりにお祈りブレイクをしているような感じとお考えいただいたら、分かりやすいかとおもいます。一部の人たちが心配されるほど、お祈りばかりしていて仕事をやらないということではありません。コーヒーをがぶ飲みして上司の悪口をいっているよりは、礼拝の方が、健康的かもしれません。美容体操のように、座ったり立ったり横を向いたり、首も動かしたりして気持ちがいい。「お祈りブレイク」をした後の方が労働意欲は出るようです。

一九五〇年代のおわりごろ、アメリカに留学しましたとき、そこで出会ったアラビア人たちについて何も知らないことに気がつきました。帰国後カイロ大学に留学することになったのが、私の勉強のはじめだったのですが、イスラームの祈りがどのようなものであるかも、そのころ、はじめて学びました。カイロ大学の女子寮でも、試験勉強の途中、「ああつかれた。ちょっとお祈りするわ」といって礼拝をしている姿をよくみかけたものです。

当時、日本人の私は、はずかしながら、お祈りというのは、神様にお願いごとをするものだ、くらいにしか考えていませんでした。あるとき「ずいぶん頼みごとあるのね」とルームメイトに、からかうように、いったことがありました。そしたら憤然として、「お祈りっていうのは頼みごとじゃない」っていうんですね。「神に感謝をささげるだけ」だというのです。クルアーンの言葉をつぶやきながら、神に感謝するのが、サラート（礼拝）だということです。

「じゃあ頼み事っていうのは全然しないの」と聞きましたら、「いや、それは、ドゥアーの祈りのときはやってもいいけどね」といいます。ドゥアーは、義務ではなく任意のものです。日本では一般的には祈りとひとくくりにされていますが、研究者のあいだでは、サラートは「礼拝」、ドゥアーは「祈り」と、区別してよばれています。地域によっても人によっても違いますが、ドゥアーはしなくてもいいともいわれます。

「神を人間の形になぞらえてイメージしてはいけない。神は男でもない、女でもない」これは『クルアーン』の中に出てくる文言ですが、そんなことをいわれると私たち、人間はちょっと困ってしまいます。頼りになりそうな男性のイメージ、あるいは、やさしく願いごとをきいてくれそうな女神さまを思いうかべたい。しかし、それは、偶像崇拝につながるもの、として厳格に禁じられます。

それでは、どのようにして、神の存在を認識するのか。「東から昇る太陽をあなたが西から昇らせることができたら、神を信じなくていい」というハディースの文言が理解のキーになると、私は考えています。神の存在を自然の生態系の動きの中に感じとる。男でも女でもない、人間のような姿や形のあるものではなく、神の存在を天体の動き、生態系の様相のなかに認識する。その動きに畏敬の念をいだき感謝すること、それが礼拝だというのです。

サウディアラビアは、代々いろんな王様が治めてきました。立派な王様もいれば、

駄目な王様も出てくる。ファイサルという立派な王様がいましたが、「王様をあんまり崇めちゃいけないよ。尊敬し過ぎちゃいけないよ」と人々がささやきあうのを聞きました。王も同じ人間、イスラームの創始者ムハンマドも、みなとおなじ人間、特定の人間をまつりあげるのは、よくない。これがイスラームの根本なのです。サウディアラビアでは、「王」という呼称は廃止され、「ふたつの聖地（メッカとマディーナ）の守護者」ということになっています。

覚えていらっしゃる方もおられるかもしれませんが、一九七六年に『ザ・メッセージ――砂漠の旋風』という映画が、シリア人の巨匠であるムスタファ・アッカド監督で製作されました。が、あちらこちらで上映禁止になりました。偶像崇拝の禁止に触れるというのが主たる理由です。預言者ムハンマド自身も一人の人間であり、映画にあるように、特別視して崇めるのは良くないというわけです。映画では、ムハンマドは後ろ姿ぐらいしか出てこない。それでも良くないとする人もいた。具象的なもの、形あるもの、そういうふうなものは、真実をゆがめやすいというのが一番の理由でした。

しかし、イスラーム世界の人たちはみんなイスラームを創始したムハンマドをとても尊敬しているし、敬愛の念を持っています。彼にあやかりたいと、ムハンマドと名づけられる赤ん坊はたくさんいて、アラビア半島をはじめインドネシアでも、道のまんなかで、「ムハンマド！」と呼びかけたら、そこら辺の人が、いっせいに「Ｙｅｓ」とこたえることでしょう。このごろのテレビにもムハンマドという名前の人が多く出て来るようです。

禁止されている偶像崇拝にちかい聖者崇拝をするイスラーム教徒も、現実社会では、たくさんみられます。シーア派の人たちの間では特に多い。シーア派の人たちは全イスラーム教徒の一〇％くらいで少数なのですけれども、聖者の墓である聖者廟がつくられ、そこに巡礼する人たちも多くみられます。スンニームスリムが多い地域でも聖者崇拝はみられます。

日本人は神にたいしてというより、人間にたいして感謝いたします。「ありがとう」ということばがすきな民族といえるかもしれません。相手からも、「ありがとう」といわれると気持がいい。日本の企業人が中東地域で仕事し、相手に何かしてあげても、現地の人たちから「ありがとう」という言葉が、ときには、まったく、かえってこない。「サンキュウー」を連発する日本人に、「ミスター・サンキュウー」とあだ名をつけ笑いこける人たちもいます。日本人のほうは「あいつたちは『ありがとう』さえいえないやつらだ」と、いらいらしたり怒ったりします。

感謝の表現の仕方がちがう、文化が違うということでしょう。イスラーム社会では、感謝するのは、人間に対してではなく、すべてが常に神に対してなのです。「こんな親切を私にしてくださる人を、よこしてくださった神に感謝します」というわけです。直接、人にむかって感謝することはあまりありませんが、「シュクラン」＝「ありがとう」という言葉があり、まったく口にしないわけではありません。ただ、なかなか「シュクラン」といってくれないアラビア人たちに、いらいらして

「酒苦乱」＝（禁酒で苦しんで乱れる）などと日本語で書き、憂さばらしをする日本人もいるようです。〔笑い〕

二　人間をどうみるか

「人間は弱い」とするイスラーム社会

イスラーム社会では、人間とは弱いものだと、いさぎよく認めます。意外にあっさりと、「いやあ、そんなに人間は強くなんかなれませんよ」といいます。イスラームが発祥した地の自然環境は、とても手に負えるものではありませんでした。西欧社会でいわれるような「自然の征服」というようなことはとても考えられない。せいぜい自然と調和するとか、自然と何とかうまく折り合いをつけて、やっていくというようなことになるわけです。

お酒を飲ませないというのも、人間は弱いものだという「性弱説」から来ています。イスラームは「性弱説」であると私がいいだしましたら、イスラーム教徒たちも、イスラーム研究をしていた学者も、一般の人たちも「ああ、この言葉のおかげで、スッとした。いろんな事がよく分かるようになった」といってくれました。弱い人間にお酒を飲ましておいて、あとで酔っ払い運転をとりしまるのはおかしい。社会の秩序を守るためには、はじめから酒などは飲ませないようにしておいたほうがいいというわけです。

「ナビード」というのはアラビア語でワインやアルコールのことですが、クルアーンのなかに「ナビードは神様からの恵みもの」と書いてある所もあるくらい、イスラーム社会では、酒に関してもそれほど厳格ではありませんでした。クルアーンに「多少の益もある」と書かれているところもあって、イスラームでもお酒を飲んだっていいんだという人もいるぐらいです。後世のイスラーム法学者が、「ナビードはどこらへんまでの酒をいうのか。ウイスキーは入るか、ビールは入るか」という議論をたたかわせましたが、結局「すべてのアルコール類、神の存在を忘れがちになるようなものを飲むのは禁止しよう」ということにしました。根拠は、『ハディース』に、「あなたが神のことを忘れそうなら、初めから酒を飲まない方がいい」とあることです。イスラームの発祥は西暦七世紀ですが、禁酒は十一世紀、十二世紀ぐらいになって、法学者の間で決められたわけです。

イスラームでは、どちらかといえば、女より男の方が誘惑に弱いといわれます。女が男に誘惑されるより、はるかに男の方が女に誘惑されがちだといいます。それで女性は頭と顔にベールをかぶり、体の線を隠すような服を着て、弱い男性を誘惑から守るのです。

不特定多数の男性がいる外へ、家からでるとき、女性は、いま私が着ているような黒いガウンを着た上に、頭と顔にベールをかぶります。ここで私がベールをかぶりますと、皆さんからは、私の顔は見えないでしょう。しわもしみもわからないでしょう。でも私の方からは、ベールをとおして皆さんの顔が案外よく見えるんですよ。ベールをかぶっている私のほうにより自由がある。匿名の解放感もある。殿方を選択する自由といったものも女性のほうにあるともいえます。

女は、自分が商品化されないように身を

守る。あの人は八頭身だ、あの人は顔がいい、肌がきれいだ、と商品のように女性をみる視線を遮断する。男性の価値観から解放された、女同士の気楽で、のびやかな、中身を大切にする生活世界を、ひろげようとするのです。

女の世界に入って、話をしていますと、こちらがおどろくようなエロチックな話を普通にしたりする。私が恥ずかしがったら、「あんたはまるで少女のよう、ちっちゃな女の子みたい」といって、からかわれました。そうかと思うと、パレスチナ問題をめぐって、さかんな政治談議に口角泡をとばしたりもいたします。席を庭にうつして、星空にむかって詩のかけあいにうち興ずる、のびのびとした姿をみることもありました。実力主義が女性たちの社会にも存在しているのです。ボス的な女性は、リーダーシップをもったなかなかの人物だと思わせます。

地球上で大統領や首相になった女性の数をみてみますと、実はイスラーム世界が一番多いのです。パキスタンの首相だったベーナズィール・ブットーは、日本でも、よく知られていますが、ほかにもバングラデシュの首相になった女性、インドネシアの女性大統領など、枚挙にいとまのないほどです。

一九六三年に私がエジプト、カイロ大学に留学したころ、女性専用の座席空間がバスのなかにあるのをみて、びっくりしたのですが、このところ、日本にも、電車に女性専用車輌が出現してきていますでしょう。当初は終電車のみで試験的にはじめられましたが、酔っ払いの男性にからまれる恐れもなく、安心して乗車できると評判がよかったようで、朝のラッシュ時にも導入されて、終日化も、すすんでいるようです。

人間は強いとみなす「近代西洋社会」

キリスト教では人間は原罪（original sin）を持って生まれてくる、そもそも人間の存在は悪だとみなす性悪説をとっていました。イスラームは、キリスト教の影響を多分にうけましたから、初期のころは同じように、性悪説をとっていました。二十世紀にはいり、西洋社会が、本来のキリスト教を捨象し、いわゆる「近代西洋社会」が成立すると、キリスト教でいう性悪説というより、性強説をとるようになりました。人間は強いのだ、「成せば成る、成らぬは人の為さぬなりけり（Where there is a will, there is a way.）」というふうにいわれるようになりました。人間は自然も征服することができる、コントロールできるんだと考えるようになります。今なお、その考え方でつき進んでいます。自然の征服こそが、人間の使命だとさえ考えているようなところがあります。

「みな根はいい」とする日本社会

日本は、そういった近代西洋社会の影響を、受けてはいますが、基底には、性善の思想があるといえましょう。人間はだれしも善なのだ、「根はいいやつなんだよ」とか、「そんな悪人はいない」というふうに、性善説をとる傾向があります。「信用第一」ということばにあらわされるように、人柄が大変おもんじられます。実力があり過ぎると「あいつは能力はあるけれども、人柄がなっていない」というふうに、能力より

人柄、善人であることのほうが、おもくみられる面があります。二〇一〇年十一月に、裁判員制度で国民が裁判員として裁判をするようになり、最初の死刑宣告がなされることになってしまいましたが、裁判員はみなとても心を痛めたのは、ご記憶のことでしょう。「根はいいやつにちがいない」と思いたいのが日本人なのです。

日常化している瞑想

話が退屈になってきたかもしれないので、ここで、プチ「イスラーム体験」といったものをしていただこうと思いますが、いかがでしょうか。

ムスリムたちは、日に五回のサラートというお祈りブレイクを、まるで私たちのコーヒーブレイクか、おやつタイムのように、気軽におこない、一種の気分転換をしているようにもみられますが、そのほかに、日常的に、ひょいと、タアンムラート（تأمّلات）とよばれるものをいたします。瞑想のことです。現代日本では、特別な人以外は、瞑想というものを、ほとんどしなくなっていますが、イスラーム世界では、普通の若い人たちの間でも、タアンムラートは、特別のことではありません。ポピュラー音楽にある「瞑想」という題の曲は、とても人気があります。

ご存知のように、日本の仏教でも瞑想は、大事にされ、意識集中型（サマタ）で特定の存在や神名、聖句などを思いうかべて唱えることに集中する瞑想や、自分のなかにうまれる感覚や想いを、そのまま観察する（ヴィパッサナー）瞑想などがあり、タアンムラートは、後者に近いようです。イスラーム神秘主義の儀式ズィクル（心を無にしてひたすら神の名を唱える）などは、前者に属するといえるでしょう。

サラート（礼拝）のほうが、「イスラーム体験」というにふさわしいでしょうが、かんたんにはできません。が、タアンムラートは、ただ目をとじて、あるがままおだやかにいるというくらいのものです。ちょっとご一緒にやってみてくださいませんか。「休む」とか「寝る」ということも、イスラームでは人間にとって、きわめて大事なことだといいます。瞑想のかわりに、しずかにおやすみくださっても結構です。

［瞑想の時間を少しもつ］

長く感じられたかもしれませんが、これで三〇秒ほどです。

ニューヨーク国連本部の高い建物の中に、「ハマーショルド・ルーム」という部屋があります。meditation room ともよばれ、初代国連事務総長ハマーショルドは難問にぶつかると、この部屋に入って、瞑想したといわれています。そこでは、座禅を組んでもいいし、イスラームの礼拝をしても、十字架をきってお祈りをしてもいい。そういう瞑想の部屋はフランクフルトの空港にも、ワシントンDCのダラス空港、ロンドンのヒースロー空港の中にもあります。

仏教国タイのチェンマイ空港にも、仏教徒のお坊さんがお祈りされる部屋のとなりにイスラーム教徒の祈りの部屋があります。チェンマイにはモスクも多くあり、イスラーム教徒が大勢住んでいます。中国南部のほうからタイにやってきた中国系の人たちが多いようです。中国南部のとくに昆明の辺りには、大きなモスクや全寮制のイスラーム大学なども存在しています。いま

のウズベキスタン、ブハラうまれのアラビア人、シャムスディーン（賽典赤贍思丁）が、十三世紀前半ジンギスカーンの時代に、このあたりにやってきて、知事となり善政をしきました。漢字とアラビア語で、彼の名前がきざまれた大きな墓所は、いまも二カ所に存在しています。そのころから、このあたりには、イスラーム教徒が多く住むようになり、のちに、タイ、チェンマイのほうにも移動していったということです。

「ラーハ（ゆとろぎ）」の時間

イスラーム文化圏では、動くこと、ねること、やすむこと、瞑想すること、学ぶことなどは、たいへん重要視され、そういう時間をもつことを、アラビア語では「ラーハ（راحة）」とよびます。この言葉は、そのままアフリカ大陸や、地中海北側の地域にはいりこんで、「よろこび」「幸せ」という意味になっています。ラーハを、そのまま日本語に訳せば、「ゆとり」とか「くつろぎ」という言葉になるでしょう。日本語のゆとりとかくつろぎは、仕事など、日本人が大事だと思うことを一生懸命にやって、そのごほうびのように、ゆとりができ、くつろぐことができるというようなニュアンスになります。しかし、「ラーハ」は、あとでもらえるごほうびのような、受身的なものではなく、これこそが、人生のなかで、いちばんはじめに大事にすることだと考えるのです。能動的で積極的な意味合いをもつ言葉なのです。

そこで、私は、「ゆとり」と「くつろぎ」をたして、そこから、りくつ（理屈）をぬいた「ゆとろぎ」という言葉をつくりだしてみました。理屈抜きのいい時間というわけです。仕事も大切だけど、それほど大事というわけでなく、大事を可能にするための、いわば「中事」。遊びは、こどものすることで「小事」。大事なのはラーハ（「ゆとろぎ」）の時間。ラーハの時間には、祈る、学ぶ、断食する、家族とともにいる、友と語らう、詩をよむ、その他いろいろなことが、はいります。いま、ここで、みなさまと私が、共有している時間は、まさに、ラーハ、「ゆとろぎ」のときといえましょう。「学ぶことが人生」だからです。

「日本人は、仕事だとか、遊び、ゴルフなど、私たちがそれほど大事だと思わないことに熱中するのですね」とムスリムたちはいいます。もっとも、近代西欧型生活様式のグローバル化のなかで、ラーハなどはほうりだし、日本人顔まけなくらい仕事にばかり熱中するムスリムたちも、近年は、急速にふえてはきていますが。

三　文化のありようがかわってきている

離陸する文化

ここまで、イスラーム社会の「性弱説」、西洋社会（近代以降）の「性強説」、日本社会の「性善説」というテーゼをだして話をいたしました。しかし、そういった文化のちがいは、固定的ではなく、とくに、近年、急速に文化の在り方が変わってきているということを話しておかねばなりません。

時間がありませんのでここで文化の定義を議論することはいたしませんが、おおまかにいいますと、文化とは、人がこの世に

生まれたあと、後天的に学ぶ生活体験のトータルをいい、文化のコアに存在する価値観、世界観は、その人が生まれ育った土地に属するものとして考えられてきました。つまり、文化は「属地的」に考えられてきました。

ところが、二十世紀後半あたりから、土地に属する文化よりも、個人一人一人に属する文化の方に重点がおかれはじめたといえましょう。「私は仏教を先祖代々大事にする家に生まれたけれども、キリスト教徒になりました」「牧師の家に生まれましたが、三位一体とか処女降誕など、わからないことになやんでいたとき、イスラームにであい、ついに、イスラーム教徒になりました」という人もでてきている。それぞれの個人に属する文化、すなわち「属人的文化」が、生まれ育った地の文化、「属地的文化」よりも、表面にでてくるようになった。「自分はユダヤ人の子どもに生まれたけれどもイスラーム教徒と結婚しました」というような現象さえ、みられるようになっています。「属地性から属人性へ」という変化、いいかえれば、個人が文化を選ぶ時代になってきているということです。

二十世紀は、交通通信革命の時代だといわれます。交通通信は、急速に発展し、今や、世界中どこへでも、かなり簡単に行けるような時代になりました。それも、かつての歴史にみられたように、民族大移動として動くのではない。家族で、あるいはひとりひとりの個人が生まれ育ったところで学習した文化を持ちだして、他の文化圏にはいっていく、まったくちがった文化をもつ人と、つながる時代になってきました。属地文化が、離陸しはじめている、属人文化のほうが、優位になりはじめているといえましょう。

生きることは動くこと

ムスリムたちは、「生きるということは動くこと」だということを、日常的に考えているところがあります。昔の教科書には、「世界の大航海時代はじまる」と書かれ、世界の大航海は十五世紀にヨーロッパ人がはじめたものとされていましたが、実は、そのずっと以前から、ムスリム、アラビア人たちが大航海をおこない、航路も開拓していました。バスコ・ダ・ガマがインドにいこうとしたときにも、いまのアラブ首長国連邦のラス・アル・ハイマーで、のんびり隠居していたアフマド・イブン・マージドというアラビア人に水先案内人になってくれるように、土下座するようにしてたのみこんだと記録にあります。アフマドが、しぶしぶ腰をあげたので、ヨーロッパ人によるインド洋航路がひらかれたのでした。その結果、航路も貿易も西洋にうばわれてしまうという結果になったのでしたが。

このごろは、日本人ほどではないにしろ、だれもが名刺を持つようになってきましたが、住所が書かれていない名刺もふえてきています。携帯電話の番号やパソコンのメールアドレスだけのこともあります。住所が書かれていないと、日本人の私なども、おや、住所不定の人だ、などと相手を信用できない気がしてきます。日本は、「動かない」、「おちつく」ことをよしとする文化があるからでしょう。

それとは反対に、「動き」に重点がおかれて創始された暦が、イスラームのヒジュ

ラ暦です。西暦六二二年がヒジュラ暦の元年にあたりますが、「ヒジュラ（هجرة）」という言葉は「ハジャラ（هجر）」移住する、離れる、という言葉から派生しています。

キリストの誕生から西暦がつくられましたが、ヒジュラ暦はムハンマドの誕生とは関係ありません。偶像崇拝を禁止するイスラームでは、ムハンマドの生誕祝いにも否定的で、イスラームの発祥地、現在のサウディアラビアなどでは、一切おこなわれません。エジプトのように、盛大に祝う地域もありはしますが。

イスラームの布教をめぐって、メッカでの迫害がましたので、ムハンマドは、当時ごく少数だった（七〇人ほどだったとつたえられています。）イスラーム教徒をつれて、北方のマディーナ（メディナ）に移りました。のちの第二代カリフウマルが、高官たちと協議のすえ、これを記念して暦を定めました。イスラーム暦は、ムハンマドらが目的地のマディーナに到着した日を、起点にしたわけではなく、動きそのものに焦点をあて、「聖遷」（ヒジュラ）がイスラーム世界の出発点であったということでヒジュラ暦という名がつけられたのでした。キリスト教のグレゴリオ暦とならぶヒジュラ暦の由来です。

「動く文化」「落ち着く文化」

こういう「動く文化」は、イスラーム金融などにも、顕著にあらわれています。それについては、時間がなさそうですので省略し、ご質問があれば、のちほど、少しお話させていただけたらと思います。

「動く文化」でいうその「動き」は、現代社会でおもんじられる「早く」というものではありません。「ゆっくり」であることが特徴です。「いそぐと悪魔につけねらわれる」というようなことをいいます。「ゆっくりといく」「行きと帰りはなるべく違う道を行ったほうがよい」ともいいます。ある場所に、こちらの方から来たのならば、帰りはあちらまわりで帰ったほうがいいというのです。さだめられた道がない荒野や沙漠で生きてきたアラビアの遊牧民たちは、道を行く達人です。ゆっくりと道中をたのしみながら、詩を吟じ、物語をつむぎ、人生をゆくかのごとき歩き方をします。このごろは、沙漠にも人間の確固たる意志を誇るかのように、一直線に走る舗装道路が通るようになり、わたしの仲のよかった遊牧民たちも交通事故で、何人も亡くなってしまいましたが、元来、彼らの道ゆきは、何時にどこへ到着しなければならないというものではなく、のびやかなものでした。道をいくこと自体を楽しむ、目的志向ではなく道程志向の動き方といえましょう。

人は動けば学ぶ。動くと情報、知識、さまざまなことに出会うといわれます。『ハディース』の中にも『クルアーン』の中にも「旅をしなさい、中国までも」という言葉があります。そのころのアラビアでは、中国は一番遠い国だと思われていたので、「中国までも行きなさい」というふうにあるのです。学者たちも、よく動きます。書斎に閉じこもるばかりの学問は推奨されない。書斎のものは全部頭の中に入れろといわれる。学者とは動く人、というイメージさえあります。

現代の日本文化では、「落ち着く」ということが、尊重されるようです。不動の姿

勢・信念、不動明王…など、「不動」が「動」よりも上等とみなされるところがあります。東京をはなれて「みんぱく」（国立民族学博物館）に単身赴任をしましたとき、「よく思いきりましたね」「なにか東京でいやなことでも……」とも、いわれました。日本社会では、ウチとソトがはっきり区別され、ソトへでる動きに対しては、とくに否定的なプレッシャーがかかりがちです。日本人にとって、結婚であれ、住居であれ、「落ち着く」という表現で語られることが多く、無意識のうちに、「落ち着くこと」が目的になっているようです。

日本文化の「多花性」

日本人は、おちつくことをよしとする文化をもつ一方、好奇心ゆたかで、旅心も旺盛だといわれます。自分が動くばかりでなく、そとからはいってきた異なる文化を、ふんだんに受容してきました。「縄文鎖国」ともいわれてきた縄文時代のころからすでに、日本人は、外からの異文化を、貪欲なまでに、うけいれてきたのです。多岐多様なものが併行して、あるいは重なりあって存在してきたのが日本文化の様相といえるでしょう。

それを、丸山真男先生は「日本には雑居性がある」さらに、「日本の文化は雑居的であって、一本筋が通っていない」といわれました。一本の筋というのは、何か西欧的なものを考えていらっしゃるようです。そういう意味では、雑居性をもった日本を、やや否定的なニュアンスをもって表現されています。加藤周一先生は「日本は雑種性をもっている」と雑種のもっている強さを肯定的にみておられるようです。しかし雑居性といっても雑種性といっても、その反対語に、純粋性が考えられます。純粋という言葉は、美しくひびくところがあります。雑より純のほうが上等だと思われがちなのですが、純粋というものは、もろいものです。金属でも純金など、純粋なものが弱いのはご存知のとおりです。純粋をおもんじる考えかたは、ときに過激にはしりやすく、原理主義などと結びつきやすいところがあります。

そこで、私は、最近、書きました日本文化についての論文（「多花性と共価性」『日本研究』国際日本文化研究センター）のなかで、雑である日本文化を、ありのまま肯定する言葉として、「雑種性」でも「雑居性」でもない「多花性」という言葉をつかって、論を展開してみました。日本には、いろいろな花（文化）が、それぞれにみんな咲き香っています。多様な花を咲かせるような土壌がある日本を、「多花性」をもっている、と表現しました。

日本は、外からの多種多様な文化を、けろりとのみこみ、とりこんできました。たとえば、歌舞伎では、オペラの「カルメン」を着物姿でおどり、箏曲には、アラビア語のタクシーム（即興）という題名のついたものもあります。伝統文化とか日本固有と思われているもののなかにも、さまざまな文化が入ってきているのです。

明治維新のときも、坂本龍馬が多様な勢力にはたらきかけて、いわば無血革命といえるものが成功しました。ヨーロッパのように王族をギロチンにかけたり、ルーマニアの独裁者チャウシェスクのときのように無残に処刑することなく、成しとげられたのです。龍馬は、「考えの違うもんが、た

んといんといかん」といった。考えの違う人と一緒にいるのはそんなに愉快なことではないでしょう。同じような考えをしてくれていた方が都合はいい。しかし違うもの同士が、ともにやっていくことに新しい世を見出そうとした。彼が作った『新官制擬定書』には徳川慶喜や、松平春嶽、そのほか、さまざまな体制派の人が入っていた。これからの若い新しい人も入れていこう、というところで、龍馬は暗殺されてしまいましたが。

明治以来、近代化の代名詞として憧れの対象であり続けてきた西洋文化が、今のところ日本列島で大輪の花を咲かせています。その陰で、イスラームの小さな花たちが咲いているようです。しかし、日本でも、特に若年インテリ層の大学院生とか大学教師の間でイスラーム教徒になる人が増えています。九・一一事件のあと、欧米のみならず、いろいろなところで、モスクが投石されたり風刺画がでまわったり、イスラーム教徒が迫害されました。ところが日本ではそういった事件が一件もおこっていない。日本におけるモスクは、地域の拠点となるようなもので三〇ほど、小さいものをあわせると一〇〇以上あり、イスラームにのっとった調理をした食品を売るハラールショップも増えています。西洋から入ってきた花にくらべれば、イスラーム文化は小さな花にすぎませんが、意外に快い香りをただよわせているようです。

文化間の「共価性」

服部先生は、その多様なる文化ということを前提になさって、そこに「通底性」があるとおっしゃっています。日本だけのことではなく、世界中の文化同士に通じるものがあるということを、ずっと昔からいわれていて、私はその論文を読ませていただいて大変感動しました。

通底性という言葉をそのままお借りしてもいいんですけれども、「共価性」という言葉をもちだしてみました。文化のコアには、価値体系、つまりものの考えかたというものが存在します。文化人類学では、文化の価値について論じるとき、すべての文化がその存在の価値において同等であるという文化相対主義によってたちます。存在の価値において同じで、しかも、通底性ともよべる共通したものが、文化の底辺につながれているのだということから、共価性という言葉を作ってみたわけです。

たとえば、仏教とイスラームは、まったく共通性のないものと一般的には考えられていますが、両者にも共価性とよびうるものがみられます。イスラームについての世界的権威である井筒俊彦が、「仏教で言われることは、カルマ（業）の思想以外は全部イスラームのなかにある」といいました。イスラームでは、この世の人間の生は一度のみとします。イスラームは、カルマは否定しますが、一神教といっても、ユダヤ教やキリスト教とちがい、アジア的要素が色濃くみられます。井筒が、司馬遼太郎との対談「二十世紀末の闇と光」のなかでのべていますが、イスラーム帝国とモンゴル帝国が衝突した後、イスラーム哲学が大きく変化し、神はアラビア語でいう「ハック」、真理という言葉で表象されるようになる。大乗仏教において、絶対者をいいあらわす「真如」とまさに同じです。仏教とイスラームはひとつひとつ具体的にみてい

けば、このような共価性が、さまざまにみられるのです。

多様性のゆたかさ

移民によって成り立ったアメリカでも、私が留学した一九五九年のころは、人種差別がひどいものでした。あのころからすると、オバマが大統領になったのは本当に夢みたいな気がします。いろいろな文化を受け入れてきたゆえの強さ、自由さがあったのでしょう。それが今は、アメリカこそが正義だ、という普遍主義を標榜するようになりました。アメリカ的基準で一つにまとめようとしているところがあって、多様性を否定しかけている。それがゆえに弱くなってきているようにみえます。

歴史をふりかえりますと、ローマ、モンゴル、イスラーム帝国などは、多様な文化をとりこんでみずからの文化を強くし、輝く業績をあげました。オスマン・トルコも、スペインのレコンキスタによって追い出されたキリスト教徒やユダヤ教徒などを受け入れて、帝国を長期にわたって維持し、現代の中東の状況からは想像しがたいほどの長期的平和を実現したのです。

質疑応答

服部英二　片倉先生ありがとうございました。本当に奥深いお話をしていただいて、イスラームがもっと身近に感じられたのではないかと思いますけれども。一つだけお尋ねします。

神の問題で、神への感謝、サラート。これは非常に素晴らしいところなんですが、講演レジメに書いておられるように、確かにイスラームのアッラーという神は姿がない。キリスト教の神のように描けませんですよね。目に見えない存在で、姿がないのであります。「神（＝自然）」と講演レジメにはありますが、そういうふうに言えるでしょうかという、ちょっと疑問が残るわけなんですが。イスラームの人々と話していると、やっぱりすべては被造物というふうに言いますから、やはり神が創造主としてあって自然のすべてが被造物という考え方ですから、自然は神とイコールには結ばれない。つまり人間はじめすべての自然に神が顕現しているという考えはありますね。タウヒードといいますが、そのような考えはありますけれども、神と自然がイコールで結ばれるでしょうかという質問なんですけれども。

片倉　服部先生、ありがとうございます。よく言ってくださいました。確かにおっしゃる通り被造物がイコール神とはいえません。偶像崇拝にもなりかねない。ただ、神の存在をどう認識するか、その仕方を考えたとき、自然の生態系のありようのなかに神の存在を認識するのだというふうにいいたかったのです。被造物を見ることによって、神の力を知るという。確かに簡単に、神イコール自然と書くと語弊があるかもしれません。

イスラームでは、神の奇跡というものは存在しない。もちろん処女降誕なんていうのもない。むしろ科学的なことがらが、『クルアーン』にも書かれていて、なかには後の科学によって証明されたようなこともあります。ムハンマドはのちの科学で、明らかにされたようなことがらを、七世紀当時、直感で、つかみとる力をもっていた

ようにもうかがえます。ですけど、ムハンマドも、神のもとでは、みなと同じ人間のひとりだと考えるべきとされています。自然、生態系の動き、働きの中に神の姿を見る、その神の言葉を預かったのが、人間ムハンマドだというのです。

司会　服部先生、被造物とその働きという関係からいって、今のコメントに対してはいかがでございましょうか。

服部　イスラームには、貴重な一番重要な概念として「タウヒード」という言葉があるんですね。そこで神は一にして、同時に全存在に現れる、顕現している。一即多ですよ。板垣雄三先生は「一即多」と訳した。これはすごい大胆な訳ですけれども。そういうことから言いますと、今言われた廣池千九郎先生の「自然の働きの中に神を見る」、それと非常に近いんじゃないかと思いますね。

片倉　イスラームに関する理解には枝葉末節を拡大してしまう傾向があるということを、冒頭で申し上げました。では、枝葉末節ではない根本のイスラームは何かといいますと、今、服部先生がおっしゃってくださったタウヒードなのです。タウヒードという言葉は、「ワハダ」という「一つにする」という意味のアラビア語から派生していますが、イスラーム教徒自身でさえタウヒードとは「神は一つだけという意味、神の唯一性ということですね」と思いこんでいる人がおおいのです。イスラーム学の世界的権威井筒俊彦の弟子筋でイスラーム教徒でもある国際大学の黒田壽郎教授が、タウヒードは「一」を意味するのではなく、「一化」の思想だということを、強調なさいました。この世には多種多様のものが存在するが、それは、すべて、一に化すものだということです。

たとえば、人間の身体には、胃も、肝臓も、腸も、鼻も、目も、多種多様なものが存在する。みなそれぞれ違うけれども、連携をとり一つにまとまって機能している、「一化」とは、そういう考え方だと私は解釈しています。タウヒードは、板垣教授が訳されたように、「一即多」といってよいでしょうが、「多即一」のほうがいいかなとも思います。

服部先生、タウヒードに言及くださって、ありがとうございました。

質問　最後まで非常に高邁なお話から血みどろな現実に戻らせてもらいますけれども。今、世界中の各地に混乱が生じていますよね。世間一般、例えば私なんかもその例でしょうけれども、大半の原因はムスリムにあるかのごとくに思われていますよね。そのように僕は思っているんです。一方そのムスリムはジハードこそ正義の元であるかのごとくに思っているように思うんですが。今日の先生のお話、高邁なお話とこの現実は非常に乖離しているんですけれども、どのように理解して、そして平和を大事にしていけるのかというようなことも少し言及していただければと思います。

それから今のところ、イスラームはやっぱり平和ということに対しては、そのジハードを本当に抑えられる力があるのかないのか、平和こそイスラームの中心になる信念だと思うんですけれども、どうも現実はそのように思えないので、そこらへんの解釈を一つ教えていただきたいと思います。

片倉　いい質問をしていただきました。高邁なお話という表現を、お使いになりまし

たが、最初に話しましたように、私は文化人類学者として、ふつうの人たちのなかにある日常のイスラーム文化について話をしようといたしました。高邁な話をしたつもりはありません。高邁と思われるような理念に、人々がしたがいたい、そうありたいと思いながら、現実には、そうはできていない部分もあるということは留意する必要があるでしょう。

　非日常的な状況にかんしての情報が多く、今日お話させていただいた状況とのあいだに乖離があるとご指摘くださったのは、まったくそのとおりで、私も、がっかりすることが多々あります。

　この問題は現代を覆っている情報の在りようと関係しています。湾岸戦争の時に一番よく現れたのですけれども、アメリカのメディアが情報を完全に支配したという事実があります。この情報は出さない、これは出す、というようなことです。私たちはリアルタイムで情報を知らされているような錯覚を起こしたけれども、決してリアルなものではなかった。九・一一の後、ブッシュが「これは戦争だ」といいました。“Either you are with us, or you are with the terrorists.”「われわれアメリカの側につくか、それとも、テロリストのほうにつくか」という二者択一を、世界中の人にせまりました。

　冷戦が終結し、アメリカは敵をうしなった。敵がいたほうが、国内政治を、やりやすいという状況は、歴史上、あちこちでみられました。イスラームを何とか敵に仕立てたいという意図が、どこかにはたらく。ところがイスラームは国ではない。厄介なことに全世界に広まってしまっている。戦争するためには相手は国でなくては困る。そこで戦争をするために「悪の枢軸国」を、名指しはじめたという事情もあります。

　こういう状況の中では、「アメリカがいうように、やっぱりイスラームがすべての悪の根源だ」ということになりがちです。そういうことでやらないと、政局も武器産業も成り立たないし、というような事態が現実としてあるのです。

　ご承知のように「国家の終焉」といわれだしたのはずいぶん昔ですが、国家は依然として、ある種の暴力装置として存在しています。合法的に人を殺せるのは国だけなんですよ。が、いまだ国単位で、やっていくしかないというところは、現実としてある。これを、どう考えていくか。

　もうひとつ、つけくわえますと……テロが起こったらイスラームということになっていますが、テロ事件を数でみますと、一番多いのがシンハラ族のテロ、それからキリスト教徒のテロ、と続きます。日本でも化学兵器を使ったサリン事件がおこり、仏教原理主義者たちの仕業だという人もいます。テロをどう定義するかも難しい。どの地域にも、過激派は存在している。純粋主義とむすびついていることも多い。特攻隊なんかも、ものすごく純粋だったわけです。純粋がはびこるのは危ないといえましょう。わかりにくい返答になったかもしれません。伊東先生、たすけてくださいませんか。

伊東俊太郎　ＩＣＣができたでしょう。International Criminal Court ですよ。国際刑事裁判所ができたんですよ。そして、コンゴ内戦の反政府武装勢力の指導者が少

年を徴兵し戦うことを強制したということで有罪判決が下されました。

　そうすると今度は国でもね、国が人を殺すのも非合法だと。合法的に今、国だけが人を殺せると言ったけど、国が人を殺すのも実は非合法だと。これがＩＣＣが拡大されればそうなっていて、アメリカはだけどこれに入ってない。でもね、僕は入っていなくても訴えていいと思うんです。だってそれが悪いということがみんなにわかったらやっぱりアメリカは困るんだから。だから入っている、入っていないは関係ない。日本は入っていますよ、ＩＣＣにもね。大部分の国が入っていますよ。だけどアメリカは入っていない。だから国が殺している国は入れない。中国も入っていなかったんですよ。だから中国もちょっとひどいことを今、平和賞の問題でやっていますよね。

　だからそういうふうに変わっていくかもしれない。いや、僕は変わるべきだと思う。だからＩＣＣをもうちょっとみんな注目してね。そしてＩＣＣを活用して、ブッシュを訴えてもいいんですよ。結局監獄に入れるとかできないけれども。そのことが問題になって、裁判所で国際的にワイワイやられたらちょっとこれは国も殺せなくなるでしょうね。僕はそう期待したい。ちょっと時間かかるけど、その方向は見えている。

司会　今の問題は先ほどのご質問いただいた方から、まずメディアの見せ方、伝え方の制限があるというところ。それから国による行いについてのＩＣＣの問題。それから文明の衝突的な内容もあったろうかと思いますけれども。もう少し整理をつけていただけたらと思うんですけれども。服部先生、いかがでしょうか。

服部　メディアの問題については二つあると思うんです。一つはメディアの体質というものがありまして、事件がなければ報道しない。これは片倉先生が冒頭におっしゃったことですよ。何もない日常生活は報道しないわけですね。

　わたしはよく覚えていることがあるんです。わたしはパリのユネスコ本部に勤務していましたから、各国の、特にフランスのメディアの、テレビのキャスターと友人であったわけです。人気キャスターがユネスコの総会に来るんです。それで、僕はユネスコ本部で会いました。そうすると向こうから、「今度のユネスコ総会では何が問題だ」と言うから、わたしは「問題がない」と言ったんです。そうしたらその答えが、「セ・ドマージュ　それは残念だ」。分かりますか、これがメディアなんですよ。

　アメリカ脱退とかね、そういう問題があった時はバッとメディアが押し寄せるわけですね。それが何もないということは、メディアにとっては、「それは残念」ということなんですよ。これがメディアの体質だということが一つ。

　それからもう一つはメディアというのは資本主義に牛耳られています。特にアメリカを中心にね。アメリカの金融業者、これはユダヤ人が主なんですが、完全に牛耳られているところがある。メディアは、お金の出所があるところを批判できないんですよ。お金を出してもらっているところは。

　だから日本の新聞なんか、朝日は左だなんて言っていますが、この左なんて大したことないですよ、世界的に見たら。日本の朝日も読売も似たり寄ったり、中間にいる

わけです。

なぜか。それは全部広告でやっているからですね。われわれが払っているのは紙代だけで全部後の費用は広告が出している。その広告を出す会社が撤退したら新聞が翌日から成り立たないから、そこを批判するということは絶対できないんですね。そういう体質であって、メディアは自由だと言うけれども、完全に自由じゃないということを認識しておいた方がいいと思います。

結局わたしもイスラームの国は一五以上知っていますけれども、非常に美しい、人々も優しい、そういうことを知っていますけれども、メディアはそんなことは取り上げません。

だからちょっとでもそういうテロ事件か何かあると大いに騒ぎ立てることがありますから、メディアは現実を、現世界を写す鏡じゃないんですということを知っておいた方がいいと思います。

司会　はい、大勢の方がうなずいておられるところからも、皆さんご納得されているところが多いかと思います。この問題についてよろしければ、次のご質問の方に移っていきたいと思いますけれども。

質問　今日は本当に片倉先生、とっても興味深いお話をどうもありがとうございました。その「ゆとろぎ」というお話から、まさにそのゆとろぎを体で実践していらっしゃる、存在で実践していらっしゃるというのを拝見させていただきまして、私ももう少しゆとろぎを自分で実践しなきゃいけないなと思いました。

一つそれとも少し関連するかもしれないんですが、お話を伺いたいところは、今日お時間の関係でちょうど飛ばされたところで、イスラーム金融とイスラームの経済の思想のところ少し興味があるんですけれども。

私聞きかじりですけれども、イスラームというのは、今お話があった資本主義的なるものとは全く対立するような思想として、まず利子を否定し、そういう意味では資本が増殖していくというのを、これを拒む思想だというふうなことを聞いているんですが。

ここに先生が非常に興味深いコメントで「長期貸出をして共に旅に出る」ですとか、「貸し手と借り手の二人三脚」。このあたりを含めて少し経済思想というか、彼らの哲学みたいなところを教えていただけますでしょうか。

片倉　金融については、ご関心のあるかたが、ここには少ないように思い、時間の都合もあって、とばしてしまいましたが、お聞きくださってありがとうございます。イスラームの利息禁止を、人々が支持しているのは、クルアーンにあるからというよりも、「金をじっとさせておくのは、よくない」、「つねに動かしているべきだ」という「動の哲学」といったものが、日々の生活のなかにあるからです。お気にとめていただいた「長期貸し出しをして、共に旅にでる」「貸し手と借り手の二人三脚」とは、「ムダーラバ」とよばれる無利子金融についていいあらわしたことです。ムダーラバというアラビア語は、長い距離を旅する、という意味の動詞「ダラバ」に由来する言葉です。バブル経済を経験した日本人は、バンキングの原点は、長期貸出金であることを、軽く考えがちになっていますが、長期貸出金の返済資金源は、利益しかないと

いう、きわめて簡単な原理が、イスラームの無利子金融の基本になっているわけです。

イスラーム銀行の話をしましたら、ある大会社の社長さんが「今日のようなうららかな日曜日、誰も何もしてない時にも、莫大な利子を銀行に取られている。銀行は取るだけです」と嘆息されたことがありました。

この金融システムは、PLS方式ともいわれます。Profit（利益）もLoss（損失）も、Shareしましょう（わかちあいましょう）、というものです。貸し手と借り手が「喜びも悲しみも共にしましょう」というのがイスラーム金融の根本思想なのです。PLS方式とは、言葉をかえると、貸し手と借り手の両者が、ともに動く、旅をするということになります。その結果、利益がでれば、わけあう。損もわけあう。投資信託方式といってもいいでしょう。さきにお話申し上げた「動の思想」といったものと関係しているわけです。

イスラーム金融に関しては、二〇年ほどまえに日本経済新聞社から出版されました『移動文化』考――イスラームの世界をたずねて』にイスラームの経済思想とむすびつけて、かなりくわしく書きました。その後、『イスラームの世界観』と題して、岩波現代文庫にいれられましたので、ご興味のあるかたは、お読みいただければ幸いです。

質問　イスラームにおける寛容というか思いやりということに対して理解できたんですが。他の文化に属する人たちとの関係については、信仰を同じくする人たちとの間の関係と同じなのかどうかということ。

特に、今ヨーロッパの中で、例えばドイツとかで、主にトルコ系なんだと思いますが、イスラーム系の人たちの同化が問題にされたりというようなことがあります。それは今日のお話を伺っていると、どんどんどんどん動いていこうとするイスラームの方々と、それからやっぱり場所というか、その土地にこだわる元からいた方との間の軋轢というような側面もあるのではないかと思うんですけれども。

そういう他の文化との共存とか共有ということに対してイスラーム側というのはどういうふうな見方を持っているかということをちょっと教えていただければと思うんですけれども。

片倉　歴史的にみますと、イスラーム教徒は、ユダヤ教徒ともキリスト教徒とも、長い間、うまく共存してきました。エジプトには、世界で一番美しいといわれたユダヤ教のシナゴーグが、いまもあります。その建物やユダヤ人の墓地を管理し守っているのは、そこに住み込んでいるイスラーム教徒のエジプト人家族です。モロッコにもシナゴーグがあり、ユダヤ人があつまり、指導者のラビが、カタールからやってきたアルジャジーラの記者のインタビューを受けるという場面もみられます。インドネシアのボロブドゥールは、仏教遺跡ですが、イスラーム教徒が守っています。先日、火山爆発があって、遺跡が頭から灰をかぶってしまいましたでしょう。それを一生懸命、取り払いきれいにする作業をしていたのは、ほうかぶりというか、イスラームスタイルのインドネシア女性たちでした。

ドイツの場合にも、イスラーム教徒の方がドイツ人を排斥しているのではない。ド

イツが好きでドイツに行った人も大勢いる。一番の問題は、ドイツ人がトルコ人を「労働者」としてのみ受け入れていたということです。トルコ人にも家族がいて、親きょうだいと一緒に幸せに暮らしたいと思っている普通の人間なのです。ドイツのほうは、労働力としか考えていなかった。それが人間の顔をみせたというので、あわてふためいてトルコ人排斥というようなことになった。

フランスでも同じようなことがあります。nation state というものを、世界ではじめてつくり出したフランスは、nation という考え方に固執しすぎているところがあります。

トインビーがいったように、世界の中心が東の方に移って来ているということは間違いないだろうと思いますが、私たちはいまだにまだ西欧の物差しで、いろいろなことを考えすぎています。

質問　今日はお話ありがとうございました。実は私、片倉先生とは七年前に出会っています。実は直接会ったわけではなくて、七年前に個人的にいろいろものを考えていたら、性弱説を自分で思い付きまして、これは世紀の発見だと思ってネットで調べたら片倉先生のサイトがありまして、「違った」と思ったことがあったんですけれども。

片倉　ネットに私が性弱説といった、ということが書かれてあったのですか。

質問　ありました。すごく残念に思ったという、当時、九・一一のこともあって。

片倉　じゃあ共作者ということにしましょうか。

質問　その当時九・一一のこともあって、自分なりにイスラームに対してはすごく抵抗感もあった時期なんですね。ただ僕は元自衛官で、自衛隊の仲間が何人もイラクに行っているんです。そうするとイラクに行った友人はすごく現地の人に大切にされて、日本の自衛隊の制服というのが緑色なんですけれども、その向こうの人たちがその緑をすごく大切にしてくれたと。

片倉　緑はイスラームの色だといいますよね。

質問　胸の所とか首の所とか、大事な部分に日の丸を掲げていたんですけれども、そういうのを潔いと言われて、すごく尊重されたという話をされたんです。実際、性弱説と性善説というのはすごく近いような気もしますし、日本の自衛隊がイラクで歓迎されたことからしても、日本がもっとアラブ、イスラーム文化と協調していける部分はあるのかなと思うんですけれども。

ただ実際僕らが普段生活の中でどうしていけばいいのか分からなくて、「知る」ということはもちろん大切だし、そこから近付いて行くことはできるんだと思うんですけれども、どうして行ったらいいのかということはやはり知らないせいもあってか、具体的にはやっぱり近寄り難いなと思ってしまうんですけれども。もし先生の方で日々の実践として何かアドバイスがあれば。

片倉　ネットをおやりになるんだったら、うまくつかえば、いろんな情報が入ってきますよ。先ほど服部先生がおっしゃったように、日本の新聞だとかマスコミだけを頼っていると、イスラームには近づけないかもしれませんね。高等学校の先生をしながら中央大学の大学院で研究された松本高明

さんの研究によれば、高校生でイスラームに対して偏見を持っている人は、よく勉強する人だというのです。新聞もよく読むし、テレビのニュースもよく聞くし、本もよく読む。かれらのまわりに存在する偏ったメディアから勉強した結果、イスラームにたいする偏見をもってしまうというのです。ジュリアン・アサンジは、「ウィキリークス」というサイトを創設して、政府等の内部文書を民間に公開しましたが、あれも一つの情報だとすれば、それもうけとめる。あなたの友人がイラクで親切にしてもらったという情報も大事にする。イラクで日本人の人質が二四〇人取られた時があったでしょう。すったもんだしましたが、全員、無事に日本に帰って来た。話を聞いたら、日本人の捕虜にたいしてイラク人はとても親切にしてくれたということでした。自分たちが食べる砂糖などがなくても、日本人には、そっともってきてくれた、というのです。そういうたぐいの「じかの情報」を自衛隊の人たちから、いろいろきくことができるでしょう。それを、みなに知らせてあげるとか。小さい事でもいいんですよ。あなたがえられた情報をみんなに話すとか、おできになることは、いっぱいあるのではないでしょうか。

質問　なるほど、ありがとうございます。

司会　残り時間が少なくなってまいりまして、今、メディアリテラシーに関する大変貴重なお話もございましたが、その前に西洋流の物差しというご発言がありましたが、服部先生がご発言されようとされていたのはそのあたりのことでしょうか。西洋流の物差しとは違う歴史の流れがあると。

服部　先ほどの質問に関して感じたのは、「イスラームは」と言えないということなんです。イスラームは多様ですから。アラビア半島のイスラームとトルコのイスラームは、全然違います。アタテュルク以来政教分離、近代国家を目指したトルコ、だから「ライック」の国ですからね。そういう国ですから全然違う。それからもう一つは、ドイツに入っているトルコ人は労働者として入っているので、トルコに住んでいるトルコ人と違うんですね。そういう面を見なきゃいけない。

労働者としてのトルコ人がドイツで問題を起こすとすると、雇用問題に関係しているんですよ。いわゆるアメリカで起こったプアホワイトみたいなものですね。そういうことに関係しているから、宗教に必ずしも結び付ける必要がないということですね。

それからイスラームが東進してマレーシア、インドネシアに至る。これは非常に遅いんですよね、十五世紀以降ですからね。そういう所で何が起こったかというと、今のインドネシアのイスラーム。つまり寛容のイスラームが起こるんですね。すべての土着の宗教と全部習合していきますから、九〇％以上イスラーム教徒ですが、そのイスラーム教徒である政府がユネスコに対して「大乗仏教の遺跡であるボロブドゥールを修復してくれ」という依頼を寄こしたんです。だから解体工事やったんです、ユネスコの国際キャンペーンで。今回のメラピ火山の噴火のずうっと前。巨大工事を一〇年間やって修復したんです。

その時にわたしも現地に二回も三回も行っていますけれども、やっぱり感心するのは政府自身も本当はイスラーム教徒なんで

すよね。その政府が、ただ一つ修復してほしいと国際機関であるユネスコに依頼したのが大乗仏教の遺跡、イスラームの遺跡じゃないんですよ。

現地に行ってみますと、国際的な学者の諮問委員会を除いては、働いている監督から現場で働いている数千人の労働者は全部イスラーム教徒。イスラーム教徒が仏教寺院を再建しているんですね。こういうことがちゃんと起こっているんですね。

それからイスラーム教徒のわれわれに対する態度というのは、日本人がお隣の県の方と会うのと変わりありませんね。

この間もチュニジアに行ったんですけれども、チュニジア人との接し方は、新潟の人と接するときと何ら変わりはないと思います。もちろんこの人は豚肉を食べないとかね、お酒は飲まないということはありますけれども、それは日本人にもあります。本当に違和感というのがないんですよ。

片倉先生もそうだと思うけど、唯一これはきついなと思うのは、サウディアラビアおよびクウェート辺りです。それがバーレーンに行くとゆるやかになって、モロッコ辺りに行くとほぼきつさがないという感じで。

フランスでもね、今起こっていますよ、社会的な問題としては。どういう問題が起こるかというと、労働の問題なんですよ。どんどん北アフリカのイスラーム教徒であるマグレブの人たちが来て、安い賃金で闇の労働をやるから、フランス人の正規の労働者の仕事がなくなるという問題が一番大きいのですが、それをすぐに宗教に直結にするのは良くないと思うんですね。

司会　ありがとうございます。先生に最後に一言頂きまして閉めとさせていただきたいと思います。

片倉　みなさま、ご熱心に、ずいぶん遅くまで長時間、おつきあいいただきました。またどこかでお会いさせていただけるのを、楽しみにしております。

（編集者注：本稿は、平成二十二年十二月八日に開催したモラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「公開講演会」の内容を収録したものである。）